

海軍航空

海軍飛行予科練習生時代

神奈川県 安藤豊昭

私は昭和二（一九二七）年七月、東京市渋谷区に生れ、昭和十五年に神奈川県立商工実習機械科を受験、合格しました。突然、父は仕事の都合で満州へ行くこととなり、私は一人伯父の家に残って学業を続けることとなりました。そして学校ではグライダーを自主製作「雄飛第一号」が完成、グライダー部で訓練に励むこととなりました。

昭和十七年ころになると我々が学校で作ったグライダーは四機になりました。それにつれて滑空部員の飛行技術も向上して校舎に隣接する高校

の運動場では狭くなり、また神奈川県下の各グライダー部をもつ学校が夏期冬期の休暇を利用して、小田原酒匂川滑空場やゴルフ場を改造した箱根仙石原滑空場、八ヶ岳の野辺山滑空場などで各学校の合宿訓練が行われていました。このころは厚木中学、逗子開成、商工実習、横浜二中や女子校では大和学園、ほかに県下ではかなりの学校が滑空訓練をしていました。

しかしグライダー訓練そのものの目的が国策に添って航空技術すなわち飛行技術の向上を目指すという目的から、政府や軍隊が関与するところとなり、陸軍歩兵師団兵務部官が訓練状況の査察や生徒の滑空技量の検定を行い等級を定め、補助官として航空派遣将校らが立ち合うようになりま

した。また当時、各学校に陸軍からの配属将校の学校教練が厳しくなり、学校の軍隊化という時代の波にのみ込まれていく時でもありました。

一方、学徒動員で近隣の農家の手伝いに行ったり、また長津田の陸軍兵器工場で高射砲の弾丸の筒に黄色火薬を薬缶で流し込む作業などに出かけたりしていました。

当時、戦局はアッツ島の玉砕、山本司令長官の戦死、中部ソロモン諸島でのアメリカ軍の反攻が始まっていました。六月に父母が満州に渡ったころから、ラジオの大戦果発表という報道があまりなくなり、開戦時に広げられるだけ広げた日本軍の占領地が、虫食いのように次第に玉砕（全滅）や撤退（退却）という言葉で次々にアメリカ軍の物量攻勢によって敵の手に落ちてゆき、海や空にそして陸に幾千幾万の日本人の血が流されていたのです。

七月下旬のある日一通の葉書が家に横浜市中区長から配達され、裏には予科練の応募志願の返

事が記されていました。

海軍志願兵徵募検査告達書

志願者 安藤豊昭

右志願兵徵募検査施行セラレ候条左記日時検査場二本書持参出頭相成度及告達候也

出頭日時 昭和十八年八月三日 午前七時三十分

検査場 鎌倉市御成国民学校

受験者心得

一 検査前ハ特ニ身体ニ注意シ前夜ハ安眠スルコト

二 検査前夜ハ必ず入浴シ身体ヲ清潔ニ為シ置クコト

一 耳垢ヲ充分除去シ置クコト

一 自己ノ被服、所持品整理ノ為ニ風呂敷ヲ必ず持参スルコト (以下略)

この葉書を持って、指定された八月三日朝七時三十分少し前に鎌倉駅の西口、江ノ電ホーム側に降り、市役所の手順の学校の試験場に入り教室で

説明を受けました。

その説明をする海軍士官が夏の白い軍服に短剣を下げてその格好のよいこと、それと今度の予科練の制服も、七つボタンでますます海軍に入りたいと、今思えばそれも演出だったかもしれない。学課試験と簡単な身体検査と体力試験があった。身体検査の時、試験官が私に言った、「こまっちゃい子供かいな、おまけに痩せとるばい、これで飛行機乗れるのかいな」この言葉が気になって、たぶん不合格を覚悟していたところ、十日ごろ一次試験合格、二次試験を三重県の三重海軍航空隊で行うとの通知がきました。

その日は横浜駅から同じ列車で松阪の手前の高茶屋駅で降りて三重空の隊門を入りました。そこは目の前が海で白い事業服を来た先輩達が広い隊内をきびきびと駆け回っていました。学課試験はともかく適性試験で目、肺活量、回転試験などをして、航空隊に二日泊り帰って来ましたが、私は背が一六〇センチぎりぎり、とにかく不合格

だと思っていた。

ところが計らずも合格の通知を受け取り、来る十月一日に四国松山航空隊に入隊せよと書いてありました。

十月一日入隊とは言え、通知には九月二十九日四国愛媛県温泉郡生石村松山海軍航空隊に集合のことと記載されていて、我々関東の者は二十七日午前十時、横浜駅東口に集合とのことでした。

入隊まであと半月、ある日、私は東京の親戚を回り今度海軍予科練習生として入隊することを報告し、九月十五日、我が県立商工実習では全校を挙げて我々同志五人のために壮行会を開催して頂いた。学校での式後、我々は全校生徒が両側に並んで手を振る中を颯爽として校門を出て、グライダー部の同級生三人が集まり学友の寄せ書きした日の丸を私に手渡し記念と写真を撮りました。

横浜を朝出て夕方大阪から宇野駅に夜十時に着く。休む間もなく連絡船で高松に渡り、松山行きの列車に乗りました。二十九日朝、四国三津浜

駅に着く。航空隊は伊予灘に面した重信川の河口から重信川に近い所にゼロ戦の航空隊があり、その隣に我々の予科練の松山海軍航空隊の兵舎が出つつあった。

我々は、駅より下士官、兵の案内で、練兵場に県別に整列、さらに各分隊、班ごとと並ばされた。関西から関東など集まった者がそれぞれのお国言葉で全然分からない。割り当てられた兵舎は第一兵舎二階の十三分隊三班であった。

そこで自分の兵籍番号を教えられ、これが死ぬまで我々に付けられた個人番号となり、私は「横志飛一四二五一」でした。次の日、九月三十日。朝、起床、食事後、被服の支給が行われた。

そのころ、巡検（当直士官が当番兵を連れて各兵舎を回る。当番練習生と下士官が分隊の人数と設備装備などについて報告をする）、これが終わるとしばしば我々にとって自由な時間となるはずであったが、飛練時代は罰直の時間になったのです。

このころ、教員が我々に対しよく話をしてくれ

た言葉があります。「練習生よく聞け、貴様達是一般召集兵の一銭五厘の葉書で集められた者と違うんだ。自分から志願し国を思う真剣な気持ちで身を挺し、国に殉じる覚悟でここに来たことは自分らにはよく分かるとる。そのお前らを一人前の海軍軍人に仕立てるために鍛えるのが教員だ。辛かったり苦しかったら今から私が読む明治天皇の御製を思い出してくれ。

わしも、水兵の時、教員に教えられた御製だ。『踏まれても根強く忍べ道芝のやがて花咲く春や来たらん』辛い時、苦しい時に予科練時代に、この俺がお前達に教えたということを覚えていてほしい。お前らはやがて大空に羽ばたいて立派な海軍飛行兵になって、国のために働く戦士になる時まで我慢し、鍛えられることによって優秀な海軍軍人になれるはずだ。それが御製の意味するお前らの春だ。それまで志願した時の気持ちを忘れるな。分かったか」と。

そして私は海軍のみならず、復員した戦後にも

この御製を口ずさむことで、どのくらい自分が勇氣付けられたことか。そしてこの御製が私の人生の今でも柱であり、支えでした。この時、私は数え歳で十八歳、満で十六歳と三月月の秋でした。

海軍飛行予科練習生、予科練生は練習航空隊（全国十八カ所）に集められてそこで海軍飛行兵としての養成を受けました。その教育は我々が受けた中学校の教育より広範囲で、飛行機乗りとして、また海軍軍人としての必要な素質、教養、知識、体力を身に付けることを目的としていました。そのための毎日の日課は苛酷で、いつときも気の緩みも許さぬスケジュールばかりであった。しかし我々は大空に羽ばたきたい希望に燃えていたのか、すべての予定を毅然としてこなし、次なる目標である飛行練習生の課程に向かって巣立っていったのです。

松山航空隊は私達が入隊するために開設された航空隊で、入隊した時は皆で鉋屑かんなくずを端に寄せて寝たくらいであった。

我々は海軍独特のハンモックの経験がなかった。便所は兵舎の間にあつて、長い小屋の中の仕切りの扉に入つて座ると、一メートルくらい下水が流れていて、上で使用した人の物が流れてくるのが見える。しばらくして兵舎にベットが入り、練兵場に通じる道路に向かいデッキの右側にベッド、左側に長テーブルと長い椅子が十四班まで通路を挟んで並んでいました。

学課は旧制中学教科と変わらず国語、数学、物理、地理など英語まで我々の前期の先輩はあつたという。これらは普通学課で、他に海軍軍人としての砲術、航海術、運用術通信術、水雷術、航空術、機関術、軍事術で中堅の軍人としての知識学術を一通り教えられました。

さらに居住区では上官や司令が来られ精神訓話や飛行軍記、搭乗員の具備すべき要件などの講義を受けました。また私は航空力学や発動機の原理、天文学、主に星座について教えられ、特に航空力学や整備術などは、復員後に航空会社で整備

士の国家試験を受けるに際し、かなり貢献しました。その内容は整備術として電気、油圧、エンジンなど、その他、電気通信、手旗信号、銃剣術、実科訓練、航海術などと幅広い勉強や実技を僅か六カ月くらいの間にみっちり叩き込まれました。

昭和十八年十一月一日、我々が操縦と偵察に別れる適性検査が、ピカピカのゼロ戦が飛び交う隣の松山基地の格納庫内でシミュレーターを使い実施されました。誰でも操縦桿を握り大空を一人で飛び回りたいのが予科練習生を志願した動機なので、死んでも偵察になど行きたくないと誰しも願っていました。だから検査には必死で皆頑張っていました。

私は学校のグライダー部で飛んでいたのですがシミュレーターの中で思うままにうまくいったと考えていましたが、後で見えていた者に聞くと結構翼を振っていたとのこと、いささか不安でした。

兵舎に戻り、椅子に座りクルクル回される反射神経検査などが行われ、この結果を総合した結果

は十一月三十日発表と決まりました。

当日、「安藤豊昭、操縦」と言われて自分の志望と願望が叶ったことに嬉しさが込み上げてきました。操縦も偵察も同じ飛行兵ですが、偵察は機内において航法を操縦者に教えたり、また必要に応じて爆弾投下や写真撮影、無線通信、機銃射撃などを行うのである。

こうして松山航空隊の一期生としてすべての教程を終え、次の飛行術練習生として虎尾海軍航空隊台中分遣隊に転属することになり、五月十五日、我々の後に入って来た後輩の練習生の「帽ふれ」の列の中を行進して我々は隊門を後にしました。高松く宇野連絡船で瀬戸内海を渡り、神戸に着いたのは午後であった。

次の朝、神戸港中央突堤上で「帝香丸」を見たが、まさかフランスの分捕り船とは気が付かなかった。我々の船室以外の一等船客の甲板上の部屋は、赤い絨毯が敷いてある豪華な部屋もあった。

そして陸軍造兵廠で高射砲の代わりに陸上の歩兵

山砲に木材で砲が上空を向くように台座を作り、敵機が来て一発射って始弾が命中すればそれで終わりという大変な代物が取り付けられていた。

夕方、関門海峡を抜けて五島列島の沖で一時停泊をして他船の来るのを待つて夜半二十艘近い船団を組んで動き出した。船団の周囲は駆逐艦や海防艦が付き添い警戒していた。「ゴトン、ゴトン」とスクリューの回る音が寝ている枕に響く。

そのうちに船長命で、我々は海軍軍人というところで潜水艦の見張りに交替で立つてほしいと言われてきました。そこで水面下の船首で寝転んでいるより上看板で見張りでもしていたほうがよほど安全とばかり、ゾロゾロはい出して中には赤絨毯の上で寝る者も出てきた。

見張りに立つと船は時間をおいて船首の向きをジグザグ運動をして走っていた。夜間は船首が切る波頭が夜光虫に光り何ともロマンチックだが、いつ敵の魚雷の白い泡線がこの船を目がけて来るか分からないので、居眠りも出来ず見張りに従事

していた。

五島列島を出てから三日目の朝、海面に黄色い土色をした水が交ざるようになった、中国の黄河から流れ出た水だそうで、そのうちに一面黄色の海面になった。神戸を十八日に出て八日目の二十五日、目指す台湾の山々が水平線に見えてきました。

空には船団護衛の飛行機も迎えにきたようであり、目指す基隆港に向かって全速力で入港しました。航海中にはいつもジグザグ航行でまして船団の速力は一番遅い船を基準にしていたので、普段は三、四日で行けるのが八日もかかりました。

帝香丸が基隆に接岸したのが夕方でした。西も東もわからぬ我々は衣囊を肩にのせて上陸し、岸壁を駈に向かつて歩きました。台湾は南の国と聞いていたので船内で二種軍装に着替えていた。全員百八十人が衣囊とトランクを抱えて客車から出るには時間がかかる。そこにさつそくバッテリーを待った教員らしき人が車内に入ってきて「こちら

お前ら、早くせーい」と言いながら、バットで床をドスンと叩き我々を急がす。「たるんどる」の一声でまず台湾での初バッター一発をもらう。

駅よりトラックに乗り、台中公園の側にある宿舎に入りすぐに寝ました。

昭和十九年六月一日に第三十八期飛行術練習生を命じられた。到着した次の朝、我々に対して慣熟飛行が行われることになった。当番の者を除いて全員飛行場に行き、格納庫前に我々が搭乗する九三中間練習機を列線に並べ機内に伝声管や座席シートなどを備えて兵舎に戻り朝食を終えた。

この作業中はすべて早駆けで兵舎から飛行場までは約千メートル近くあり、このあと、午後飛行作業のある時は我々は毎朝スツ飛んで飛行場を往復した。

海軍の飛行機はすべて航空母艦に着艦するこゝとが出来る技量を要求されていた。陸上でも訓練の場合、飛行場の指定された一点の所に飛行機を着陸させなければならない。それは飛行場より狭

い母艦上の一点に、それも三点着陸をしなければならぬからである。

三点着陸とは前輪二と尾輪一の三カ所を同時に接地させることが理想であった。それは母艦甲板上に着陸制動索が張つてある所に降り、その索に尾輪の胴体下部から下げた着艦フックを引っ掛けて機速度を止めるため陸上でも操縦訓練をしていたのであった。そのため五メートルの引き起こしや誘導板による高度、速度の誘導着陸を實施していました。

私は十三時間くらいで単独飛行を船津分隊士の同乗で許可され、一人で後席にバラストをのせ飛行することになりました。その日、いよいよ今日はすべて一人で乗るんだと思うと、人知れずニヤリと笑みが出たものです。指揮所に報告して駆け足で自分の乗る機まで行く。飛行を終わって水平飛行で飛行場を見ると、指揮所や格納庫などが見え、「ああ俺はついにやったぞ、見てくれ一人で飛んでいるんだ。」と思ひ切り叫んでしまう。しか

しこれからが大変だが、先ずは新米パイロットの
出来上がりでした。

我々が野中分隊長とともに台中航空隊を急ぎ
立てるようにして、新竹州苗栗県後竜街にある不
時着飛行場を基地として、竹の瓦を載せた兵舎に
分遣隊練習生として着任したのは、昭和十九年九
月六日のことでした。

当時の日本陸軍はビルマのインパール作戦で
敗退し、海軍はマリアナ沖海戦で空母三隻と搭乗
員を多数失い、さらにサイパン島に上陸を許し、
そこに大型爆撃機のB 29の基地が出来ることにな
った。またアメリカ軍はガダルカナル、ニュー
ギニアと島伝いに、海軍の第三機動部隊がそれを
護衛して、次の目標のフィリピンのレイテ島を目
指していたという状況でした。

昭和十九年十月九日、敵機動部隊台湾東海上に
接近中で、明朝敵来襲の恐れありとのことで、我々
は入浴中に総員整列の号令がかかりました。それ
から夜遅くまで飛行機の分散偽装作業やドラム缶

の分散作業を実施しました。果たせるかな未明に
「敵機来襲」の声、慌てて兵舎を飛び出して上を見
ると、ちょうどビルビンを下から眺めたような
爆弾が落下した。瞬間、轟音とともに防空壕が横
にぐらぐらと揺れ、砂煙が壕の中に飛び込んでき
ました。

この米機動部隊の空襲は敵が台湾に上陸する
ことを諦め、沖繩に上陸するためとフィリピンの
レイテ湾の攻防戦に備え、台湾からの航空戦力の
補充を断つために約一週間、台湾上にある航空基
地を叩き戦力を消滅させる目的で、台湾の東の洋
上に四つの機動部隊を配した結果でした。

そして機動部隊を時計の反対回りに逐次時間
をおいて波状攻撃をし、台湾基地の航空隊に休養
をする暇を与えぬ戦術で、朝発艦して台湾の北部
を空襲している間にその機動部隊は台湾中部の東
の洋上まで南下し、そこで朝の空襲機を着艦收容
する。

それと入れ替わりに昼、発艦した空襲部隊は夕

方台湾南端ガランピー沖で收容するという戦法で、連日それこそ朝早く東の空新高山の方角に峰の大隊が群がって飛んでくるようにして、おそらく百機以上の敵機が午前中そして、午後も食事も取る暇なく敵の艦載機の空襲がありました。

最初の日は我が戦闘機隊は花々しく迎えて戦いましたが、二日目、三日目になると「相手代われど主代わらず」で、戦って帰投し弾薬燃料を補給し、休む間もなく飛び上って戦闘するという状況でした。その日々の結果、我が搭乗員の疲労で損害は日増しに増しました。

そのうち、台湾沖の機動部隊攻撃に参加した陸海軍の攻撃機と戦闘機、爆撃機などは合わせて二千五百機くらいと言われていましたが、実戦に参加したのは千機くらいで、特に洋上飛行に慣れない陸軍機は大誤算でした。そして戦果は機動部隊を壊滅したと報道されましたが、行ったきり戻って来ない機の数を数えてもこの作戦は決定的敗戦であったといえます。第一次攻撃隊が出撃したつ

きり一機も戻らず戦果も分からぬままに大戦果が発表されました。

この時、後竜基地上空で零戦とグラマンF6Fの熾烈な空中戦があり、敵機が火を噴き、パイロットが落下傘降下し、基地の病院室で黒焦げの包帯だらけで寝かされていたのを見ました。台湾から機動部隊を攻撃に行った我が攻撃隊も一つの機動部隊を破壊したに過ぎず、他の機動部隊は未だ健在であったのに、その時の大本営発表では敵の撃沈破四十五隻、そのうち空母撃沈十一、撃破八、と大本営から発表されたのです。この攻撃開始前、索敵機によつて敵の機動部隊は四個群が台湾沖を遊泳して、ほぼその全容を正確に把握していたことが分かっていただけに、敵の発表「二空母軽損害、重軽巡洋艦二隻大破のみ撃沈は一隻も無かった」との違いがあまりにも差があります。そして敵機動部隊攻撃に向かった我が飛行機約千機に乗っていた搭乗員の数はおよそ五千人の命、何とも言えずただご冥福を祈るだけです。

我々はすでに台中基地に後竜から戻って来ていましたが、昭和二十年二月十五日、練習機教程を終了し同日虎尾航空隊台中分遣隊を退隊、即日台中空に入隊後、諫早航空隊（長崎県）に入隊を命令されました。思えば昭和十九年五月、日と同じくして予科練を巣立って三一空に向かう百八十人は哀れフィリピン南西海上で被雷、水漬く屍となり、自分らは鬼と地獄の飛練と言われた台湾の台中航空隊ですべての教程を終わり、これから行く延長教育部隊がどこかという時に、全員戦闘機、片道飛行要員かと噂があった時に諫早航空隊に転勤の命令を受けました。

全員台中空で会い、揃って四分隊とともに十八日に隊門を潜り、退隊して基隆港に集まることが出来ました。我々はその二日前に、台中市に外出して砂糖五斤（一斤六〇〇グラム）入り二箱を買って帰り、衣囊の一番底にした上に支給品の衣料を畳んで入れた。これは内地に着いたら家に送ろうと考えたからです。

誰もが同じ気持ちらしく基地の我々は内地に戻り延長教育を受けて実用機に乗るために、内地に戻ると考えていましたが、これは後に知ったことであったが、海軍の上層部が考えたことは、台湾沖空戦で台湾の航空勢力はゼロに近いが、搭乗員の数は沢山いて、その者を内地に戻し再教育をすれば、優に特攻要員として使えるのではないかと、と考えて船を台湾に回したらいいのです。

当時、硫黄島攻防戦に内地から続々特攻が攻撃して戦果を挙げていましたが、次の沖縄戦にも特攻を出すに必要な搭乗員はいくらいてもよいのでいつでも特攻に出せるようにする計画を立て、基隆港に台湾中の多数の搭乗員を集めたのでした。我々は二月十九日、基隆港に着いて、三つのグループに分けられ、我々は第二船団の「日昌丸」と一部は海防艦に乗ることになりました。海防艦には横志飛十九人、二十日に第一船団が出航したが、その船団は港外で待ち受けた米潜水艦によって撃沈されました。

日昌丸に我々が乗った時には既に陸軍の兵隊が若干乗っていました。この船は一応仮装巡洋艦とかで航速度はかなり出るらしく、護衛している海防艦のスピードが遅いのでそれに合わせる状況でした。

ところで我々の船は二日後の二十一日夜半、スクリューの音がして、いつの間にか船が動き出していました。それから五時間、薄明るくなった海上には、我々の船だけが全速力で走っていました。

やがて船は速度を落としてやっと海防艦が近づいてきました。聞けばこの船は中国に向かって走っているとのことでした。後で聞くと、中国へ半分くらい来た時に台湾から電報が入り、「その船引き返せ」と言ってきたという。船長は、このまま中国に直進することを決めたという。

今引き返しても潜水艦が待っていることは分かっているだけに、電報は受信しなかったことに後で事情を報告すればよいとの判断でした。その電報の意味は沖繩に敵が上陸した時に、台湾から

九三中練隊で特別攻撃隊を出撃させようとしたのでした。もしまだ台湾にいたら我々も命令されたかもしれないのです。

そして基隆を出て中国の青島、大連、朝鮮半島の沿岸を南下して二月二十八日、やっと門司にたどり着きました。この時期、国内の主要都市はB29の無差別爆撃が連日のように行われました。

門司から列車を乗り継ぎ諫早駅に着きました。しかしすでになぜか顔を赤くして体調不良を訴えていた者もいましたが、大村海軍航空隊諫早分遣隊に到着しました。しかし二、三日経っても何もせず兵舎にいましたが、その理由は、我々が飛行訓練を再開するに必要な飛行記録の来るのを待っていると言う。

それは後で知ったのですが、第三船団は台湾を出たのであるが撃沈されてしまい、積んでいた教員や我々の飛行記録、海軍履歴書などが無くなり、諫早基地の司令は我々の飛行機乗りとしての資質の判断ができないとのことでした。

一度、技術テストそして離着陸互乗をやらされたことがあります。そのうち、真赤な顔をしていた仲間が発疹チフスやアメーバ赤痢と診断されました。そのため我々の兵舎そのものが隔離病棟となり一歩もでられませんでした。

計画では台湾からここ諫早基地に着いたらすぐに体験飛行作業をして、慣れたら実施部隊で実用機に乗り、特別攻撃隊として実戦に参加させる予定の上層部でしたが、肝心の飛行記録や履歴書が届かず、また船内で発疹チフスやアメーバ赤痢に罹った者が出て、全員隔離生活を強制させられ、飛行作業も中止であった。

かくして隔離は長引きその後、その他の健康な者は航空隊の裏山に土工として働かされ、まるで羽をもがれたトンボ同然で、恐らく歯軋りしていたのは、いつときでも早く沖繩に送りたいかっ上層部ではなかったかと思えます。

ここで、次のような諫早の司令の訓示、「沖繩戦は終決し、いよいよ決戦はここ九州になる可能

性が大である。ところで貴様達は本来所属すべき隊はここではなく、東京航空隊であるべきで、ここ九州の守りの部隊は間に合っているので来る六月三日をもって東京航空隊に転隊を命ず」と言い渡しがありました。

すなわち第十航艦の指示で、未だ入院をしている十一人の者を残して我々は本隊である東京海軍航空隊に転隊となり、諫早航空隊を後にしたのです。

我々健康になった者が六月三日に諫早航空隊を退隊して霞ヶ浦航空隊に向かったころでしたが、その後、退院する者がかなり出た時、九州地区の第五航艦からの命令で予備学生上がりの石川中尉を指揮官として特攻錬成隊が編成されたとのことです。

霞ヶ浦分遣隊に到着後、私は中間練習機で特攻隊に編入されました。「中練特攻」これが私が特別攻撃隊になった時の乗るべき機種でした。我々全員の技量は本来ならば当然、実施部隊に配属され、

零戦に艦爆にと乗っているはずが、その時期に台湾沖航空戦、米軍の沖繩上陸と重なり、飛練を終了しても各自の乗るべき機種種の零戦も艦爆も特別攻撃隊優先となつてしまい、結局、中練で高等飛行の特技を習得したのです。

着いて翌日、一人一人中練機の前席に乗り慣熟飛行テストがあり、その結果、私を含め二十五人が中練特攻要員として飛行場の反対側にある朝日村に行くことになりました。そして特攻隊と言われて、夜間急降下爆撃の練習を行っていました。当初はやはり二百五十キロの模擬爆弾のせい、着陸の操作の誤りで、脚を折つたり着陸緩衝ゴムを切つたりして、だいぶ怒鳴られたりしました。

八月九日、我々諫早から霞ヶ浦に転勤して来た者が、朝日村にいた者を含め全員集められ、そして千歳基地には特攻組二十五人、美幌組九十四人、霞ヶ浦組三十五人に編成替えになった。

我々特攻組はそのまま千歳に転勤でしたが、その目的は空襲のない北海道で訓練や後輩の指導と

か言われました。しかし中練特攻はこの日をもって解散することになったのです。我々が衣囊をまとめ霞空を出た次の日、美幌に転勤の者達が発つたと聞いています。このようにして、今にして思いますと、飛行機搭乗員として突然しかも当然死すべき命をなぜか何度も助けられた命だったのです。

【解説】

執筆者が予科練での教育訓練を終えて実施部隊に配属され、終わりには中練特攻組に編入されている。

この中練特攻とは、筆者が訓練のため台湾で散々乗り尽くした九三中練のことである。エンジンは天風一型空冷星型、三百馬力、最大速度二百七キロ、この練習機に二百五十キロの爆弾を装着し敵艦隊に体当たりを決行する、これが中練特攻であつた。

日本全国にあつた練習航空隊を廃止し、第十航

空艦隊司令部をつくり、その航空隊に所属する飛行練習生の中で飛練教程を終わり、次に実用機教程に進む練習生を選んで中練特攻隊員として、敵の上陸に備え各地の飛練航空隊で編成と訓練を始めたというのが上層部の意図と考えられたのもである。

執筆者は昭和二年七月、東京都渋谷区下渋谷生まれ 神奈川県立商工実習卒業の昭和十八年十月一日、愛媛県松山海軍航空隊に第十三期甲種飛行予科練習生として受験合格し入隊す。満十六才。十九年五月、予科練習生教程を卒業し、台湾虎尾海軍航空隊台中分遺隊に第三十八期飛行予科練習生として転勤、神戸港より乗船、十六日〜二十五日に基隆港着。即日、台中分遺隊に入隊。第三十八期飛行術練習生を命ぜられ訓練開始。

昭和十九年十一月三十日、飛行術練習機教程を修業す。この間昭和十九年十月、台湾沖航空戦に参加し連合艦隊司令長官より部隊感状を授与される。

しかし練習教程を終了し実施部隊にて実用機教程をすべき実用機（ゼロ戦、紫電、天山、彗星）等すべて先の航空機戦で消失してしまい、我々は止むを得ず練習機で空戦の訓練をしている時、内地の諫早航空隊に転勤命令がでる。

昭和二十年二月二十一日、基隆港乗船、二十八日、門司港到着。この時第一及び第三船団は基隆港出航直後、港外で待ち伏せの米潜水艦五隻によって轟沈させられた。我々の船はその爆音を聞きながら真西の中国に向かい無事であった。

諫早航空隊入隊直ちに飛行訓練をして、慣れたら他航空隊にて実用機にて練習し、最後には特攻隊として鹿屋から沖縄の激戦地に突入するはずが全員発疹チフスに罹り寝込んでしまい、二カ月がたち東京航空隊霞が浦基地に派遣されることになり、昭和二十年六月三日、入隊し技量テスト飛行を行い、指名で特別攻撃隊として連日夜間飛行の訓練を行う。

昭和二十年八月十日、特攻隊は解散となり、北海

道千歳海軍航空隊に派遣を申し渡され、列車で千歳空に移動し、その地で終戦を迎える。

戦争体験から「命」を考える

福井県 矢部善昭

プロローグ

六十年前に戦争があつた。私は思う、悲惨な戦争を風化させてはならない。『愛する家族を守るために戦争する』そう言つてた皆さんの人が死んだ。でもたったひとつの命は何にも代えられない。自分が死んで愛する家族を守れない。人の命を奪つて何を守るといふのか。本当に大切なものを守ることは戦争をしないことだ。

一 赤紙の叫び

昭和十二（一九三七）年から二十年に私の地区（鯖江市旧新横江村、当時の推定人口約四千人）に発令された赤紙召集令状受領証三百九十一枚が私の手元にある。命を引き換えに戦場へ行けとの命令書である。肉親が涙を隠し最後の悲しい思いが残る、色あせた赤紙。うち六十五枚には「戦死」